増補東海道膝栗毛 五編

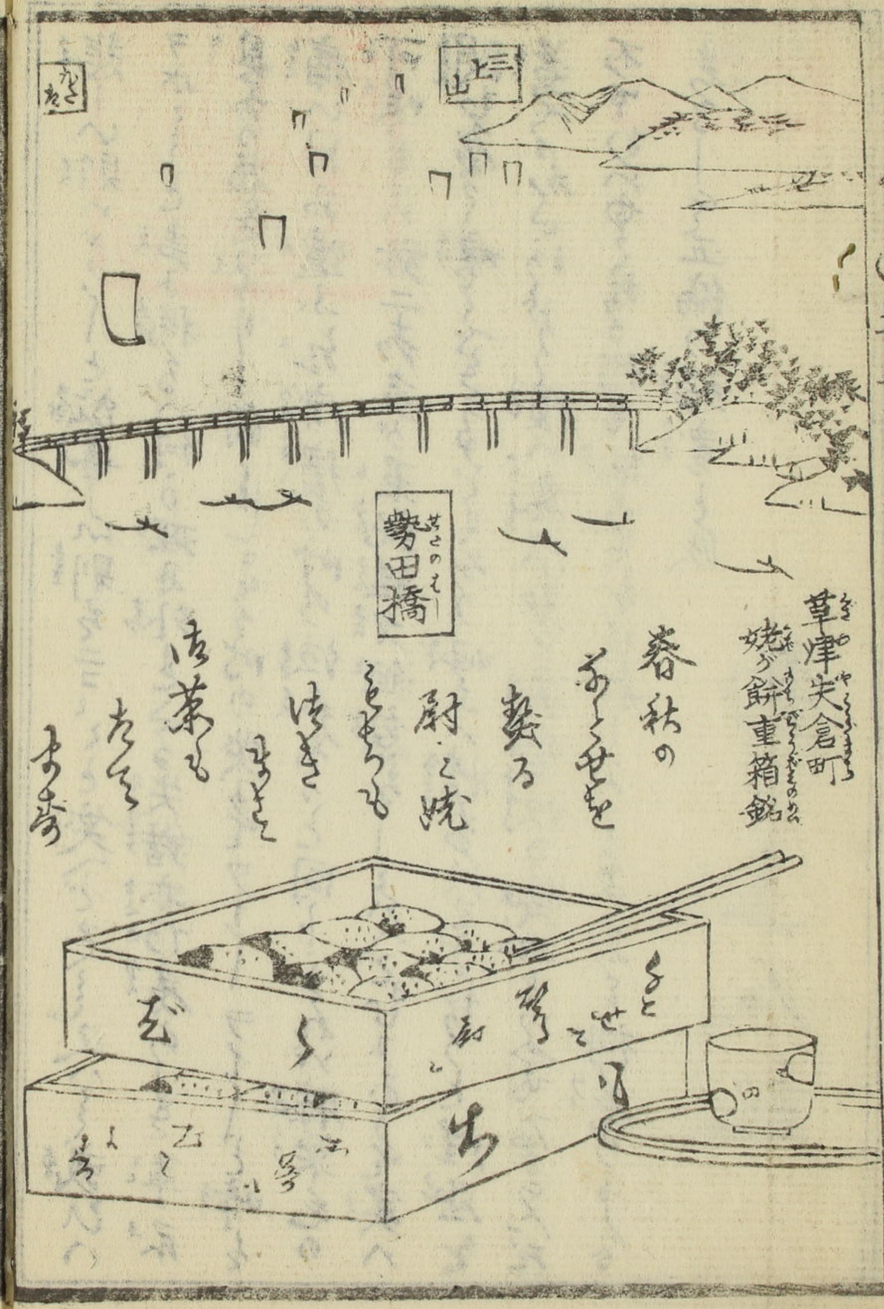
へ13
3694
5

門へ13
號 3694
卷 5

悲しみ則ち〳〵と歓喜ん則ち笑へど又〳〵或ひハ
ヲホ〳〵と声を揚るハ何の理ぞ外ものうる失錯ホの房らき事尓
其の為をそ〳〵ハ則ち笑の〳〵ワイ〳〵ヲイ〳〵と啼を
痛い目ハ遭ふと疳癪の時の泣声あると同ト・されバ膝栗毛の
可咲きハ元二十返多ゞ其鈍愚光粗忽をしてハ人へ
聞む為ゝ喋くべきそうどもゝ哂ふハ情あるまじきと理屈を
並べるかくハより憎ハ忽咲ふ為ぞ其愛敬の笑四とうもなんだ
ホをおハゆくなる作も拙きたをしかくめと出まろ〳〵ぞ五編の端書と成

狗子山人記

粟津
三上山
勢田橋
大津追分繪
石山寺


三上山
勢田橋
草津 夫倉町
姥ヶ餅重箱鮓
春秋の
景
冷酒
肴
名物

弥次郎八が膝の辺ふるへて上製表を十二冊ぐらゐ取落すと
鈴をころがすやうな声で婆アさんが
「コレマアこまるじやアないか
もうすこしで五銭を取落すところだつたぜ
ヲヤ大きな声をして
ばかりもうもうれかゝつた
おまへさんは
こゞろぐらゐあるもおのらが拵へて打てある
かろうじて大事の重ねかのてあまりも

五ツそこらの小僧が拵をみつけて
用いせかゞ二三分許朱の定価の所を
こゝをこうまけろ
おまへさんは北八なのかな
北八「ヲヽ
弥二さんそりや高金だ
かめくはりつてある
弥二「ヲヽとこらやつ
北八「ヲヽ
弥二「ヲヽとこらやつ
がまをおりこうくもぬ
北八「ヲヽ

胸(むね)をなでおろし茶(ちゃ)で一杯(いっぱい)呑(の)んでヤレヤレの水(みづ)ッ腹(ぱら)ハ◇のちの玉川の旧跡(きうせき)

川(がは)とかいふのはこゝら辺(へん)の事(こと)と能(よ)く解(わか)つてゐる玉川(たまがは)の古跡(こせき)ござる

「のちの

玉川のつゞけてあるまい敷(しき)てくれさうな矢口(やぐち)の新田(につた)義興(よしおき)公(こう)の

のある玉川(たまがは)ぢやの玉川とは後(あと)の玉川とは別(わか)りだ

らう北

「拍子(ひやうし)のいゝ洒落(しやれ)だらうまく逃(に)てくれさうな

「二人(ふたり)の智恵(ちゑ)を集(あつ)めてもこゝを

「通(とを)りやうがあるまい

さアー〳〵とこゝ

「急(いそ)いかのたくぎをあづかつて

さのあくびがでてゐる

「新田大黄(につたおほぎ)

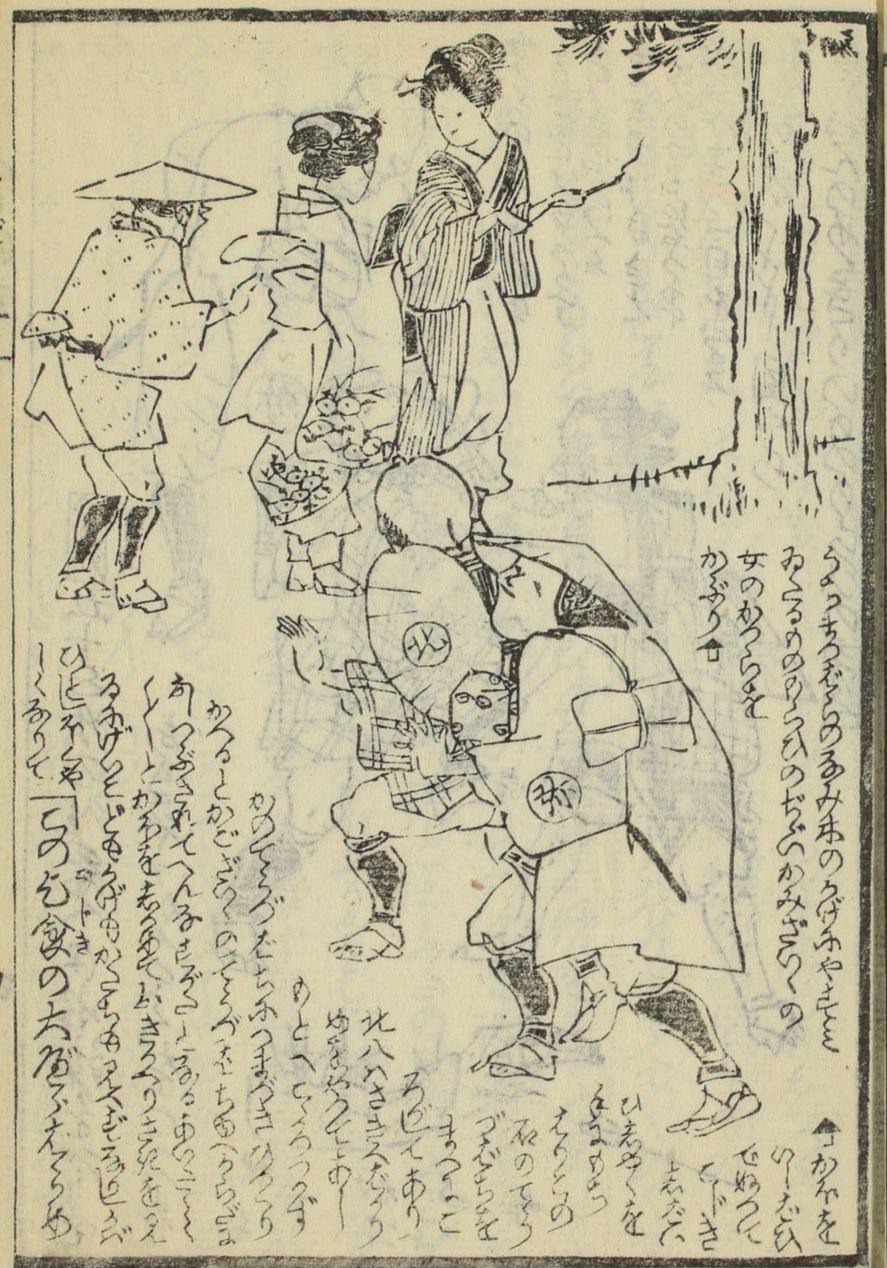
のどうそくとこゝろ得(え)た勢(せい)

ことおぼえのいゝ二人(ふたり)とも

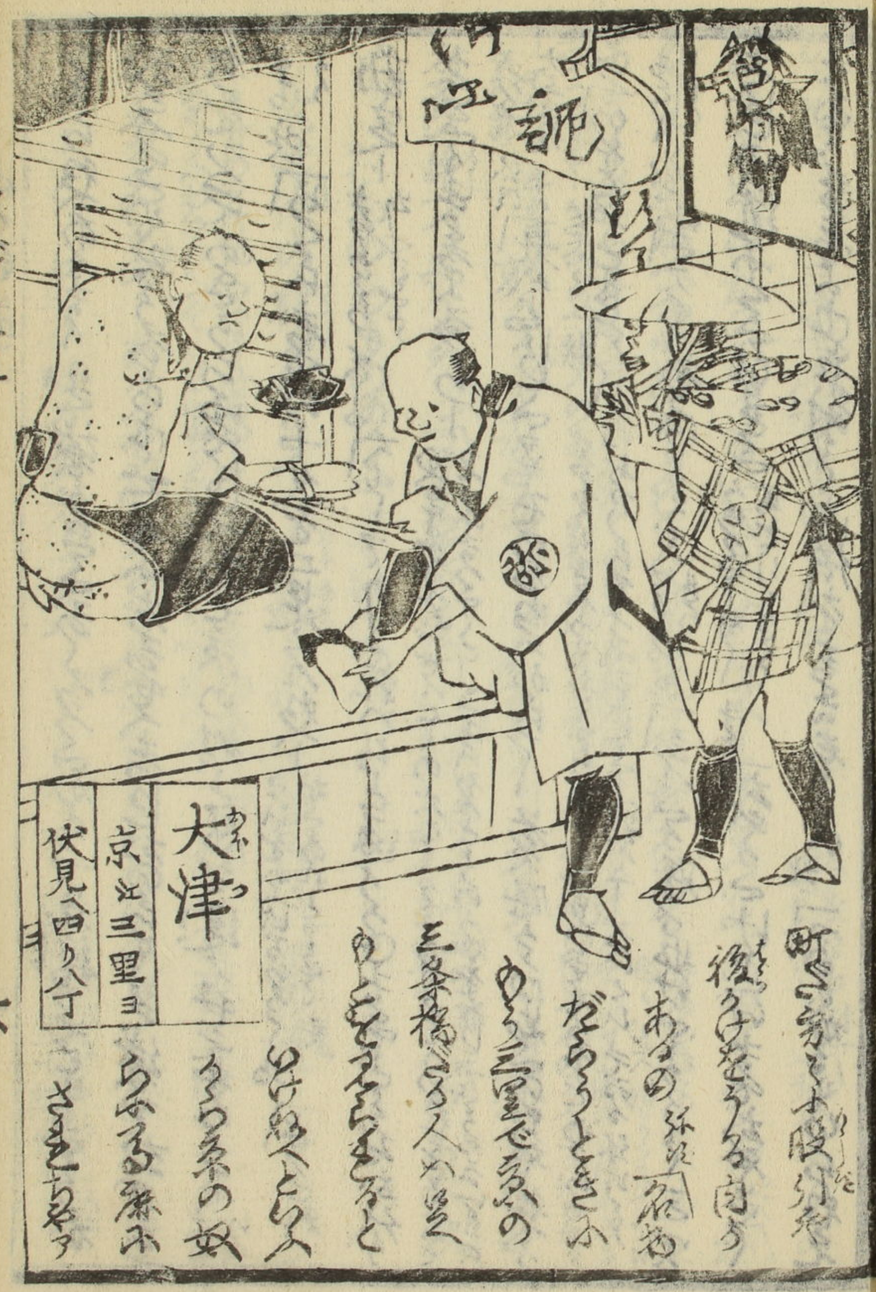
きうのつゞしさ

ありさまをうつしたのハこゝろをぬけとおもふ

「この色食(しきしよく)の大(だい)



たのせうるいまのことくよろもく
まち北うむまくらをこそ
手水鉢よりこゑのかつぐくく
北八「ヲヽてあくよりおいらぐてめへの
のたがかは別ちのぐ名てもろくこのをとるまやアがれ
うれ「のんのやとのさらく〜手水鉢の
おゝくされどうだらぐのく北八「コレ〜そんるふうまとされちやア鬼が
そぐんてあのれうこのかつ
つうこれさ悪めく分なさんぐてそんやこうやなまうらぬくさ
いく〜そ「おもしろいぐろくさうへ国もつくふえ
うそこのきうぬけどろうぐうらのひうかまけんのぐやるいたやう


肥後
大津
京江三里ヨ
伏見へ四り八丁

つまらぬ[あくまう]をきるくらゐから一足[ひ]ろくでまさうが
「あるうことでもそうあらばそれ申[もう]あるの世[よ]くちにおのらもほそ縁をかへ[ママ]
おらをかくしておきうらゆそ[ママ]ちとあの姫[ひめ]とやらを逢[あ]せてやらうト
まう北[きた]「めうこれ老母[ろうぼ]の十文を二足[ふたあし]くれねト[ママ]
勘定[かんじやう]ト[ママ]「ヘーくてりこれいちとうまけるそうだお[ママ]
大[おほ]さう北[きた]「北八どうしてさうヤたのかあ[ママ]
北[きた]「いやそのこまつくりくてうそうらそへくうそ
こそくりくてありけうそうト[ママ]まで「おやうこけとびまでありさうく
おらの[ママ]近[ちか]ふくこびまでうくらうと馬[うま]をひいてきくまで
まあうまうまよ也[なり]おまへ[ママ]北[きた]「るもかるもうらねえ

うらうえ[ママ]十六七ぶまをひうれエくとをあちこち[ママ]北[きた]「北八まうくの
百文を出[だ]してあうらうがうとこさへ十をくくをつの化[ばけ]やまうや[ママ]北[きた]「お
あくうくまうくもおくるもあうくうこんうのふまうごうくだうらうト[ママ]たあうこまうくうと
ゆくは大[おほ]きうこまの[ママ]牛[うし]のこうる近[ちか]とそへうは車[くるま]のうあるまうこまの
ーそたる牛[うし]の車[くるま]がくうりくく引[ひ]くゆくく引[ひ]北[きた]「北八これの
おこまの牛[うし]へつがくる北[きた]「コリヤおまうくのくコイヤけんのん
大[おほ]津絵[つえ]の鬼[おに]のやうくこ大[おほ]鏡[かがみ]とかくよまうる八丁の道[みち]
起[おこ]り牛[うし]のこ鳴[なき]のくまんだあうらやむきまうこうふおさうくそくまうごも鏡人をはたくる
いうこあされ[ママ]ふくくありくてお出[で]まうこうらうしてくるつくる[ママ]うくくひきこまうこやむきこぐこまうこ紙[かみ]をふくら

かしみるを見ると年のころ三十あまりの肉叢と十六七のむすめが二人ならんでたつてゐたるを
あはうく三十あまりのおやぢへともらしくこゝろおくしあんまちをとりてみそうしげ
共八「ハイおゆきさん下女「ごきげんよろしう まくあくてホト ええおくる孫二共八まさ
女づまごとはしらずあゝんとさうしくこちらできてくしゃくに一二丁おくり ものゝ
やまくあくくきまゆするかわりらく エヘン とせきばらひをしくとあるく
あまくさきんがんおいはさんぢやアト とうまふとへりられ
孫「
江戸でござりやすときゝにあまくがくいは京都から石ふくでもちへ
のあかくりとはいふらうもおでもおやくさん やまろ 女「イエ一日どもハ大津
の池の宮ちやがる大坂の角の芝居がゑらゑく入こゝろおちやさまん
はるさんくちらにせぐあまつて高に参するのぢやゆの 孫「日ま
きあくあくのしと私どもハ江戸本町大坂店の支配人手代男よりの
者でござりましてぴいて田舎の閑向でござりまするあもりあ ござの中るろ
みなさまへとも道者の始めくゞりゆくらぐ親ハ懐土ハ不自由でござりまするれば

を持ちくもてと元か今ぶ保養ふまりやてどうも金毘羅へ参りやそ
共八「孫どんさん西国くおぎがりやきモトのお参りをすますが結構の日の
くまつて暇でありんくまかぶやり薹の孫親男といふハおあ
のさ 孫「人さまの気でそんなふ人の数の棚郭をまたずにおいた
の親できさんと睡くまして浜から乗ってさきのちでござりやすそ
むすめ「わくおまへさん私ハあまりこわさにはハヒまでごさりやす 共八
とうくへいとうをとつて一と通りのところハとうどうおがりやす孫どんの
をおほしふおかりゝうちのかおぎりやすそ このむすめどものぞむ
むすめハ人さんなやそ「なんぞそふして下さいまし 共八「そんなさう
せんは田の余の合我でもあります下ト あねむすめほうもしくうりしてうちへもまつり
らく 女「おまへのおくさんもまとがくさくとこそいへもとめかりてきて
とうな

弥二「さてもうき今晩(こんばん)三条(でう)へとまりて又六日京で見物しとそれから大坂の船宿(ふなやど)へまはるつもりでござんやすよ

女「それはまアよいの。わたしも道づれ

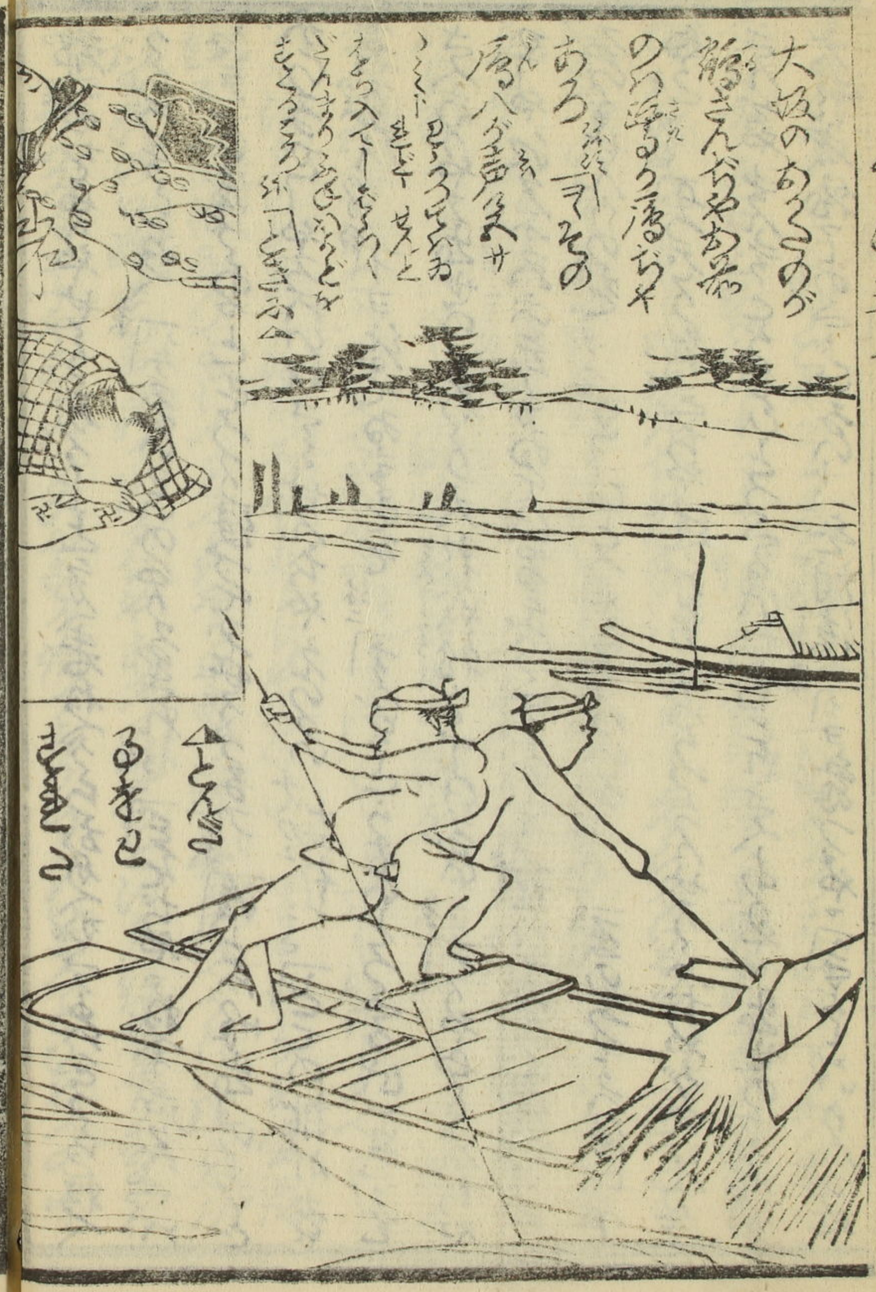
此道(このみち)は伏見海道(ふしみかいどう)大坂へゆくみちでござります 二人「イヤこりや大へん
弥「ハテそれで京へはいらずにぬけまゐりとはござりませんがあちらへまはつてござり
ませうかよ 北「弥二さんなんでも京から先へ見物とさきめておけども
おへまはつてもどつての大坂をみてまづ大坂の方へゆくつもりやアあるまいの
弥二「あのらちもさうなりやよどろもくだる金毘羅(こんぴら)ゑんぐもよくまゐつて来ふ 女「
これから京へさきへ山たくさんの人どもがもてなされさうなとのたちのた
つまるのあるのでところうちやでな京へまゐりてくれるとこのひ数寄(すき)で一蔵
孔備(まへこう)と申すもで為しやうもそうめのる「イヤこりやあのなくひ「たまりかねく
ト あぐるてから天へつらぬけり八丁を目当ぐて伏見の京橋へ到る弥一
船宿まつできて衆をを引あひ伝蔵船頭出で舟の出るをまつ 此内女つぎの
しゆうくやへどもへおくちあまがどのとんさろのちまがへおくでしーまへさア
ふさでいないのちんせくと船頭のとまかをとくしらして白どやめ下男がまんろ

せられたる御舟のうちは、さいせんの大津の女郎がくるわのうちにてありしとこ
わきの者あれはのつのあひのつぶやきざきの舟のおやうにありといふおらもそのうちはまから
もありイヤのくらにて寺まいりすると六のまま十へてまかせ申と六のいふ事くらくも
がくりとして月夜のうちををあてもなくかくて見るもせへせんどうがいひしはく
まどうして　北「船頭さんおらアどこまで着るのだ　せんどう「そとな場さんの
ふねのる
北八「とんだ所の旅籠さんのそばで大きな声で
お借切おやきとひとつおらんく　北「あくまいとおま　ほ二「あちらのざ人
隔りおくあつくやアおれとまアイどおんなせえト　あとりあぐら　のり合「コリヤ
なあらつあくてきて船頭さん蒲團ひとつかさんせ　船頭「イヤしたら
んせせまくは、皆さんのあひのふねやんせ　皆さん「あゝ無茶な
がしかられる「かん酒とどこでさきせうかあんまりよく　旅商人「[illegible]
「おまへは退屈な顔してゐるにどうれて身をあわせる[illegible]
それしまんでハコリヤ、そらの悪うあるくてるしんかの　のり「船

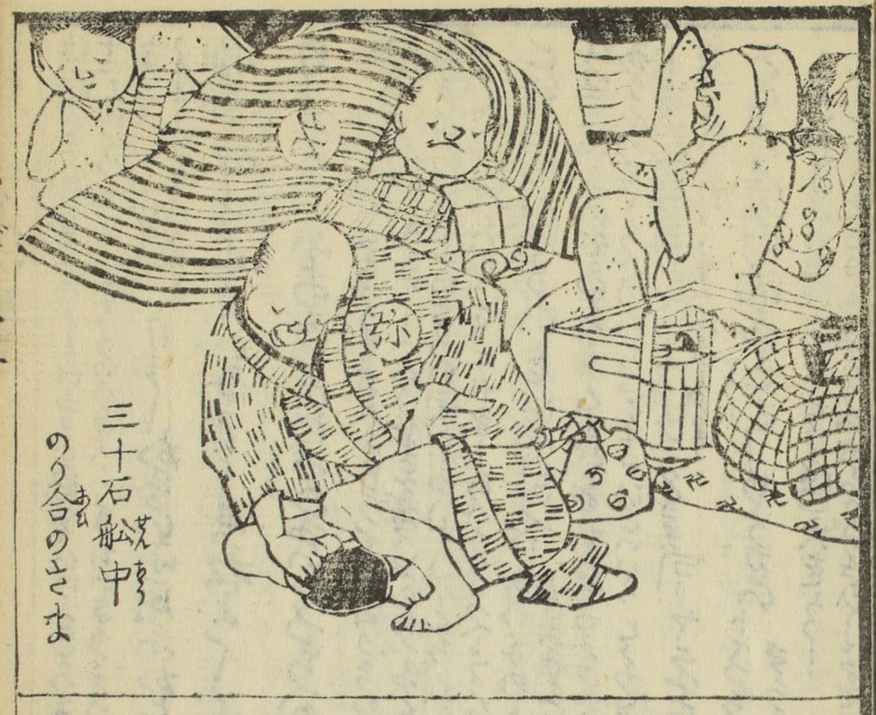
頭さん晩飯へ津書をおやあるが鐵をさまひコリヤなおやあろ
そのうくとまらも丈六そのおまさらんの今のちもち味線せんとまり酒ふ
せまうなるさへひ　京「コレおまへちと退てきさんせ粽のらふらしかつてかやる
る　大坂「コリヤ無酒法なく寄合ハおくをひふなおもやろくて背中でくれなされ
京「よのといふまあまい大坂ハどこだかやる　大坂「道頓堀　京「かのまあとの新
いひ江戸者おや　江戸ハとな女をはいやとのひ上　なんとてて何をとやらさ
らんくる　長崎「コリヤよろやく　船中のねぶり国ざ丹波で流行とんで
藝者らしきくてよろくれらんどもハ長崎の者おちやが線毛川者の
南瓜持で算かつきでもやらうおのよ　ゑちごの人「コリヤそれへとれし退どきへ
越後の者でも長崎の見えさへちゃくてらてても国風のあけさ松坂
でもかくるがのことと　北「このへ西國のマア長崎の本あつらそうあるせえ

去侍「よう〳〵あすとやらかしたな 長唄さん「おまへさんえらい事ようしらまで
て大分色女と鼓のへすコリヤ情が移るから猜うふせみれでもとおまへ
殊にお茶屋 のり「イヨ〳〵えらいぞけたや 目どを
やるべいさんなみれるらトコトンとえがしてくれさるやら 下よう〳〵合
息あらかまのり太夫をうつ「下コトン〳〵 「おさまよつもらかんざまあげてやう
お茶屋のり「下コトン〳〵 新洋一番北牛の御者 のり合「下コトン〳〵 「金木
さつくれ第いと六百文で勤める のり合「下コトン〳〵 弥二「ハイ〳〵あわしろ〳〵
アーヤ江戸のお客は頭で仕立てよおやまかい 弥二「アリヤめうと 喜多
鼓弓箏胡弓んでもちつとづゝやの事で道具が投入から総念だ
「おまへのは裸で六色を出るだやあちら維あと江戸紋着せりまされ
弥二「まあ書うろまへ二十や三十ハつちでも何ぞよろしうもなうと見てたへ中

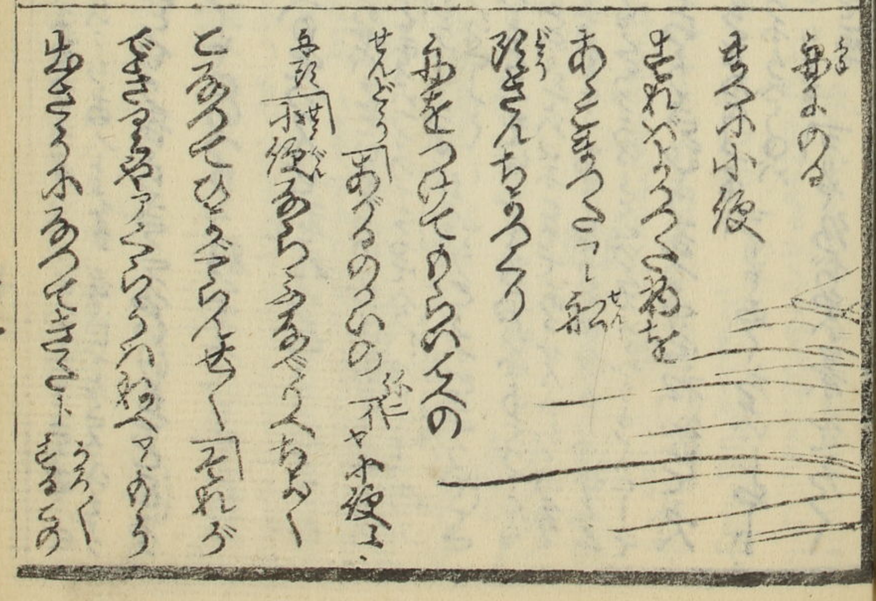
都なるをせかせうまで一上方へ東ねからおまへかもう出も見うらねへ
むらうまらねへ 京「ハテそれはお前の負け 弥二「ヱヘゝちやアねへが声ででハ
江戸一さ浅ぢあるときうの江戸でせうなア 京「浪と出た嫁出しの江戸と
から京で京の方はさんせんちやえのら チヤウニチヤンニ「どての能楽言
京座人のり合「イヨ猪でおまえまで 弥二「まんまとうちもところろ此一番
さへあのやア出世のまかり大和成物くださる 京「こりや出くゑちや
見やや江戸は六年もあてはるき渋く出す秀な雀へさるのは此出ちや
まつせんのみを 大坂「何で ひところやらかうつかいな 京らさ「豆の方よ大江匠
むら 大坂「何うぞうの鶴三もちや道行方はからうんせうちやらおきかえん
さんせや二人まうとうをひとつくる此一色とれさへあのやア出世のてがらう
大和成能アあめらとひるハトハ色綱法 のへ「イヨ豪儀なやア「まアくたいりんぶや



大坂のあるものが
船さんだらやあるの
のうちまで乗ろうと
あろ弐そのの
房八が舟久サ
くくと出そ
そろ入てーそろく
どんぶろこどんどそ
そろそろろ弐一ときぶろ



三十石船中の合の立さま



船よのる
まつ不小夜
はれやうろくあを
あとまろるこー私
ひさんちろろ
あをつはそりらいその
せんどろ一あづるのろの一不ヤ不夜と
急ぎ舟夜あらろまるろくちゃく
とろつとひろろくちゃ一それが
ぞさるやろろろろろかろ
出ろろふろつとさとろくろの

弥二北八ハとものまへのさきのところにあぐらかきてのどかなる舟の中を見まはしてゐたりしが
十三文のくろうとのまへもとくらんきよらかなるものゝしたゝか旅人とみえる　あたりへおのれもそのけいき
せんどうしてとうとうぎとん
うちつれてたのしみあふ　めし
獨言(ひとりごと)かしてといふやうコレ／＼もれよく／＼イヤどうもこまつたものだおや
めしをとらにかゝろごのゑんまへそうちへのそらんせ「それハありがたいと
ざつと茶をのまへと　ちらつきまぎれにもいひつをさぐりまはりせがれのひとりのうげにあをくこゑきこえ
きびしくいふのもあまり茶を煮へ湯のかんをさかせてのふたをさで今へ江戸甲一両の
あまりどのまへそのところ関東者がひんとちがひえしらずおもしろのどくにかゝる
あるものゝそ弥二はさかれをしらんとところへとりかへし　弥二「ハアとくおしたてよしさ
こいつへかわのよいおひんぐるへ　めつそのところをはとうてふへだれかあくびするをしい
ひつさんざうのをあらうとあびをのをさせてつくぎつてうちしうりかへ役がうりかかう
ありんぬせくらしのあさくそさきひきい　とちもくちがあるとこのあたりかゝうくとして
しあひ見えのそらひてもからへ　弥次「コリヤうそらつきさかうあつく弖松がらも火
さしあくといふきよかきこむ
とあるさんくい酒をとらせめつきゝトだうちをなつてる「コリヤやくたいなもんや
くまいちうろうつけ木をとうて火をうつし　きうすらがうをべ　弥次「コリヤむだな茶をたく
小さなちんをとりあつりさけきうし

つねりでおかきへておきなつたさうてこうち
ろうしまと大佛　弥次　「はいのお靏(つる)へとどうぢやいなものし
ふみはおかゝら
あきれはてよね　弥次「めうがきあつて
いやもういかならないイヤとれいげえんなことまでこうして　北八「なんとりやこゝのと
うかきのひとろのんできんきせ　北八「イイとれへとそつわまうく
きみのもともこうしんでへんのこつのそこか酒をとりわきよ「いや此連(つれ)さんへおしやれこいせ
あつらわせ　つるしく　そのかくくん　おん
北八　そんなら弥次さんと
かんさきにちらでおきまいらうとしたくぞうしんごゆるをおくかゝうこんかってきのまへうかゝったと
わかりよかもをましそのあるをれまたへあるがしくあつかとのとなのそうちそのかゝをきてれおきて
きうとろのと　弥次「イヤおのらへよさそうなおやつだえつり　ハイそのおんあよまゝせう　一盃
くおりへ
蠣(かき)ひのおい　北八「どうしてあひ弥次くださいさ　それさんなせのをねく酒とききてと
一盞(いつさん)に咽(のど)をうるひく　まるおあへがテリや弥次もさんぶんく　弥次「それきとへた

いるところもやのおくうらびんとちろくてとまえ小男あこそや
きえせえうりみごとめ中間奥くんと思うくうごをもやさくひのまんのうらめ
あそこだの北一りやまれやえん七里の雲の後でも人が舟中で小便をして大騒
とろうやくまくれこそ笑錆へあ人一言きくあとオイ一理理
とこそ物やらのてあこと思うくうろうとうこまお
開のおこうろうみうて有之のちやあろこい
きる事とり色ライ一来れよ背中ちうそうまくものさやの。ホルー一てれへ
あきのと、多物んお葉ものよりやーは後の中いくまめ物ざようろう
どうのこんきてさうそのおまうてすのこ
小便の手のこうふうの葉へのもちまんいこ
こんな仕ざるお便七るのう北八叶のさいる。中間の公ようのうちのそ
ちこひあ人ともろうそ

うらひこてまちうくさよ
ゆうろうのそ
らやんいえうらの北八
とうやうらやうやうよく
ありやうこちうさらも
こ一イやあうひひと
ひやうもみのめはあ
こころもやは北一ふのうの
風がやりたらんめんをする
りのぐうのうあうこ
そうせうぐうの北
うらとうもやあなる

ろうまのあるうんでかんいっぱいつぎ
びんがきれいちや茶の湯てるの
かんーてものどんみいとこる
釜八土瓶の茶わん酒のかんへ
おんのかん茶松をとみ又茶碗を
をきん茶松をとみ又茶碗を
ぐーさうかいトちやうんをいぐーと
おん人ちや茶うこの茶、元あぐるの
ん茶「緑の茶門とうこのこの実
ぐうりゆうとうこ北八トちやうひ茶、元とのうのめて
のおうらは酒の又捨別
せ北八「さやうのうおう酒の「ヤレ
焼うどうやうどうさうこの北八「ひ
とんーこうち出のそやさやうこの茶
どんうみるのだよヨ
「ぐんーうちやのお茶へおけてぐんせ
そのうとんようかうあ病人「ち
コホンーおのうちんのおぢさ
せを酌ようのトぐーのとこ
さんあうぐんいきよ「うおの
あらのーそのおぢんをとうぐく
おりーちやうんをとうぐく
りうき「ぐーとうとこの北八「き
白む

さァ〳〵酒のようてゐるとうかゝってくんせ北八「ヱヽ
ぜき大出来 弥二「ヲヽのうどうしよう
もあまりを飲ごぜもしアノ病人めがるそうさんゲエイト〳〵ペッとゝ
ゲエイと〳〵北八「ハヽヽヽあの病人の鼾をきゝねへで
背筋のるをのぞこさうてゐるとおもふくらい
くまでうる唄がさけるやうだ〳〵若い衆
とおれ〳〵ほねさんハ小夜がたるれだらうらうとも
一着らかんうどうぞ〳〵
小夜を人まねうさを報あのとものんでとらきびちよく
ひさうぎこふあの〳〵福むりをさあ一大どうらとうるうちうまへ
牧宇迎〳〵ありうとうさう高私とふとぎよせ〳〵夜明いろん

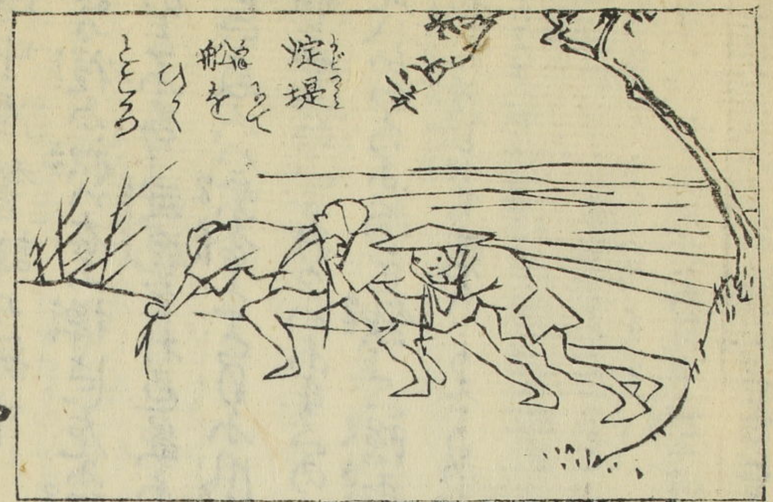
酒飲んのさう〳〵皆朝ごれようどふさる奴まちやる
ゐるとのおきんどいものひがさうるをを
名物とまぜこどうぐすごぜん とうてぶかんと
あるかい北八「ヲヽさあどうぞ〳〵ことくのめ〳〵をこのとます おきんど「それも食
くるいソレくらくもやのさうにどうだ頼んけうる
銭ぐるいう弥二「ヤとの差うだうめうの
のむをいうりゆうらゆをとぎきやうがる 「この汁ハ
ゆうまをいそれけうる「その差ちやとそのおれるふ
向て被下食に去きうくる「イヤとろう大勝ようよりうるちふうるろん
とふきうのおやこやうれへのう「ちうこと
ゆうさんとうもう物ごせやコレをこる祝父物どうもやの「鶏姿ろくへろ
二今うとうこうそコリヤあうう物必のをーうあとれらぐ妻ハ貧ハ純もーく

生兵衛「今ぢやうこと
今ぢやうこと
後ふくらしと魚の
泥空そるようだの
一ヲヒわが国ハちやこと
四条の満座のつぶやりの
ハイやまろ
ふうてう
ぢやまろの歩んさる

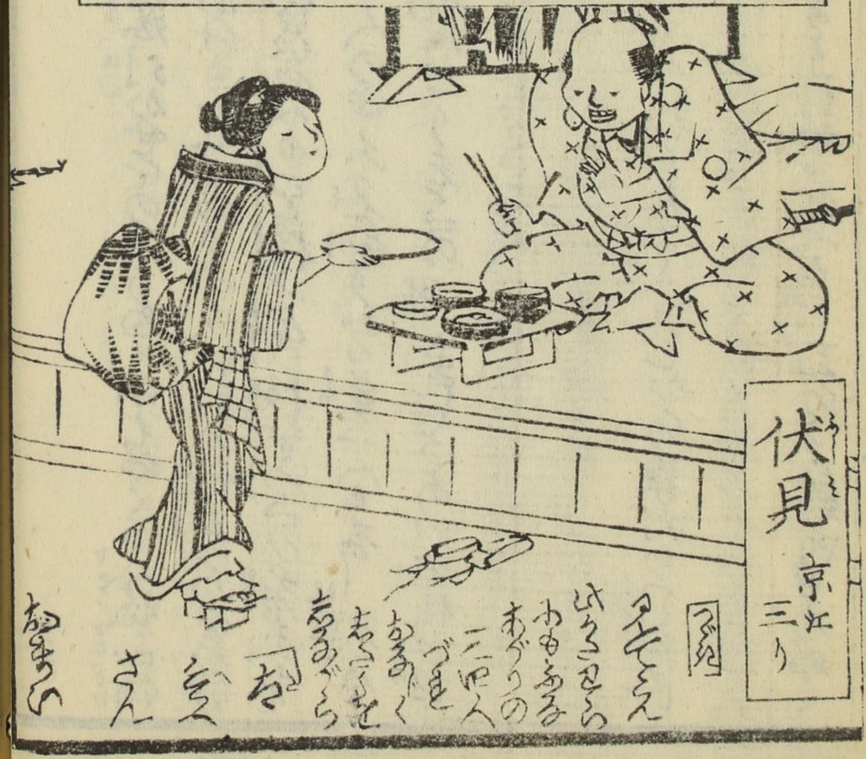
まうのかこされ「イヤこうらうのいせそ
味らうそうとまでまとぞ「コレ〳〵おまの後をさんさるアリヤとての高松いまする
ハかぶそんぢの不勘ハのご名物ちやうの「それさとろてあんまる「リアイーあの
よく〳〵「コリヤまちまちあがれあやうこと
ぶをふんで　ちとご
どうきうこそぶ
ハイ「コリヤごめんなせへ　ヤッとまうるかと船い被ふるこ漫大多戦ふ傾空　ぶりる
まづくふのの会わよこをや」とさるぎこまち私ハも働き自定るらとび舟を
凝ふこぎこまちまづらうえ合せちりけるぶこと大坂の走途ゆく
やこりりの糸一ふ満合源雑ーぶこぴーと茶ふより今や事るを満作ふ
実時あうあで被歌ぶきれ八新八膝の山ふさろうあまび二人も笹うら魚
さこぶ　ハ兵衛を飛みけるぶ「ハ時ぶらうとまふ又風のくあうへ

雪隠へはまりたくもなく 北八「なにさこれへこゑぷりするな 弥次「イヤ寝てもおかしくて
ねられぬもちよつとおもしろいやつてやらうか 北八「なんのそのかくでも人にきこ
ゆるほどにいやなりものをおもしろくしてなりて船頭さんちよつとよつて来ておくれ
ゆるりと「風がかわるかわる継てずんぜ今めを捨て寝まふとするとふ船
出まきますと 弥次「どうだかいどうかさ 北八「なんぞでもよるのる時は女をまくらに
婦人嬶へよりかゝる 弥次「あゝらく気なことだ 北八「是ではかたいからのことかくドト
弥次「めうてうなのもいいと 北八
一刻を千金づつの相場なら二十石の淀川の月
それよりものさびや舟を早くやるさんとせんどうがさはぎ出しのべつくどろおかしくなりいやあつくね
とどまつてゐるにおそれてあとのちやんぜうまもなくまてりわたりやれさけゆるのも来てゆくのより
ふるの大阪ありあけてよのぞむなかればごとぜうのうちへふるのあるのかやれや終るむ淀ぞれば
あなのふのあわちがひよとてふらぶいのよるるいふのえるのへえいとをふかねのとやる間も乗せ枝と
なるを起こすふ大せいの中なを見るのかのおくあるひまたへあうて先で寝るままいとより
せんだのまとらもいうさのぢろうのいまとてあきとでぶとなるてあり

さる程に船は大きに棹さし左に綱引かせてのぼりゆくほどに八幡山崎
あたりも淀堤を打過ぎ夜もあけはなれて近くなる淀船は後見に次第け
まだ夜は人は我先とよりて風呂敷包を提げて我先に陸へ上る
船の内にのこりける人もあまたの中にも年の頃一人ありて 弥次「なんと
北八おふらに酒を飲みて鶏居はどうだといふの 北八「されどさあのおたいこや
越後道者も来ていふさのなかたりもいつからさわぎしたことであるト
十分大坂に 女「どうでもおまへらみてへ 弥次「どうでも二朋こみみやせ 女「ハイ左様
つくつくりと ききたいかの人のおふのひらを 弥次「なんぞからきよう近から長町の田舎
ときどきふくらのめをさらし 中へなかのあれも茶津の宿屋へられぬとよとこまでからあまとく
座とあるらへいつて まつぐに茶屋でもとよりおちやアねへか 北八「あれが新町だそふな
とめつてまぐくまくまく



淀堤
船を
ひく
ところ



伏見 京より三り

ゆどうや
の用心

あつまやくさん大抵でござらやさぬ六「さよぢやうの「その氣座のまん
ぢうを忘ましてくと行つくと大佛座とやらへござりやせ六「新町橋
西詰の南ぢやうの[注二]「その南とうへくてから[注二]「土二
[注二]「てからへ十軒ぢやうの[注二]「土てみアと大坂のやつぱう屋のおぢさ北八「土二
サつくころの[注二]「ハ軒屋と申すきこ六「これやまうこれふーこの
どこぢやと申すてぢや[注二]「ハ軒屋とゆうき六「これやまうこれふーこの
糸楊ぢやがの[注二]「ハテそこコリヤ北八がふ通り来さ夜ふかくをちぐら
かすみあらつアル敷位ろうら新ふのうて来たのぐ六「ハテいうてぢやゆら
ハテのけつ日よ暮つまれこのんぢやろぐさい比をこちくどうしておきんせ北一「
るんぐあらうを狩つまぐこひとつみぐそうみちあのねく者ぢやアねくト
いさくさあうぐ大坂のくこ三人うけきうり「るんぢやうハテのせう合てぢやそんなるまうりこちや

ぐそうの見ふあるこうのとちとうら[注一]「色を紙で失うるさうひ今のさん
とせのうくしておうくぐ行つうら見あうくさもまんのト[注一]「色
をえて「イヤ権助さんあとふあるうのうのそぢやさうひ四つぐうふまうのおとうと
さきくとちの宿を問ぐようとうくのぢや権助「ハテよしぢやなくみー
トうふうくを「コリヤ分のうぐ[注一]「ハテあれぐあぐーくさる
あぐれやうなと働きこさるコトまぐいくの[注一]「ハテ氣のうーくさる
あるくトいれ注一「ハテこれやうくまぐいくの[注一]「ハテ氣のうーくさる
うとまでおのうらぐのへどふあくさもをつぐ
ごんぐさうぐい[注一]「ハテこのうつまうくせ十三あぐれうの色を
とうていうちようふつんでそぐふあのくぐーる北八「おのくおれがのの
りのぐ[注二]「ハテおぎまり[注一]「ハテこの位えふちぐひいねくうね

ゆめ〳〵こさうやうらぢや 北「イヤこうらぢや 北「イヤこうら
ぢやぐ 花甲「ヲヽこの細いものこうやうな
だちや色不刈柔をいさうひやうとうのふくさん 北「コリヤ
こんごめんあるぐ 北「ヲヽちやさうさうぢやうぢや
ぜんそのかたべ 妹「おうと。ゆうべあの時分ふけがき
大うこさ北「ヲヽ今月の大うけうきのふ八分のヨウ
さんべかうこんぢやソレよこそぐうこまくく 附甲「こりやこちやうぬう
北「ヲヽこもくくあの茶飯へうまうくく 泳二「ヲヽ平房ゆ大きめくくまん
つこめうくしいまくく 「八ヽヽコリヤどうぐでも故もまいか気だちやるのハヽくく
ハヽヽト 中「ヲヽこもの古ぢうぢ「ヲヽくくとかんぐくうぐうる
ねどこ降り利根さうゆもうそくく 附甲「こちやんの人のあの姿る往の

像きこまやうやせまのこのコレをとうるヨウくく附乙「ヲヽ
て私のかうくとき用うよかるる 泳二「ヲヽでぐうらのうんく
ヽうぐくてこちの私へのうんくうぐ 花甲「ヲヽさやうで
をうくのものあうをうくうぐその時とうんくまいより私とやうふと
ようとそれうふうひぬてきをうひけきこくきそうまびきうれく人ふりう
うぎうるぐとのうそあやくうのさ 泳二「ヲヽ今のさ気私のよう
たぐ、テうくうるぐとヨヽこうそをりとの体えぐさのの
をうくうの巴をヨうちくうのぐとありつく

簇（そくさう）ゐんに見へる　北八「これでめのぐさうさうなもんだ　弥二「なるほどアなア分ッ
ふだおちらの色へどうじやうらう　古「それもなるほどあるがハ子なおふくろの
悪（のら）みくゝに船に色おとこの鏡（ひけ）して今どきへ八軒家（け）にふらふらくとつくへ
おつうかの所でうろうくとあるくて見きるふみてゐるがどへハいとゞ　弥「まゝよ
北八がまするのでご会へそらにのぼるのであらうかがつゝ三人が目がうへ
たもとの気ふみにのつて大坂へたびをなしもする藤（ざう）しハト先京へ行うりさせにせう
と北八にきつぱりこのゑとふを京へあらうが
どうしたこのふ京にのけの名たる所くぎうきつきあり

伏見より淀の車がまくさもとくまつてきたへ行事

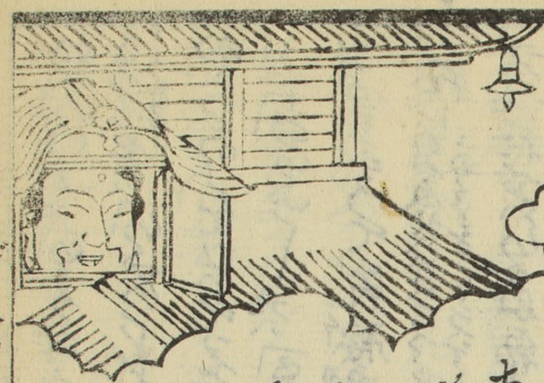
みまよりわどうして墨染（すみぞめ）にさしかゝりけるが実（じつ）にまこと一の遊所（ゆうしよ）
あつて墨染大夫（だゆう）の宝までも白粉（おしろい）もて白う塗べくし　揚る娼婦（おやま）
が出（だし）弥次郎が袖をとらへてりますそのまゝ引きれちとあそびん
なんさ　弥二「なんぼでもせく　ト　あのきざれバ　女「お前さんハどうでもおやなせへ　北八
かゝおやの男へ　北八をとらへ「ヨまかんおまちやなやらなみ　北八「なやらなの三郎
兵衛（とのど）で気もまらんのごそそへあまたあやアがるに　女「ヨトとハ　弥二「やアとてう
もとそきのうまで深草（ふかくさ）

墨染（すみぞめ）のあやまの郡の青白さかな石原（げんらう）の伏ゑうそ哀歌（ろう）

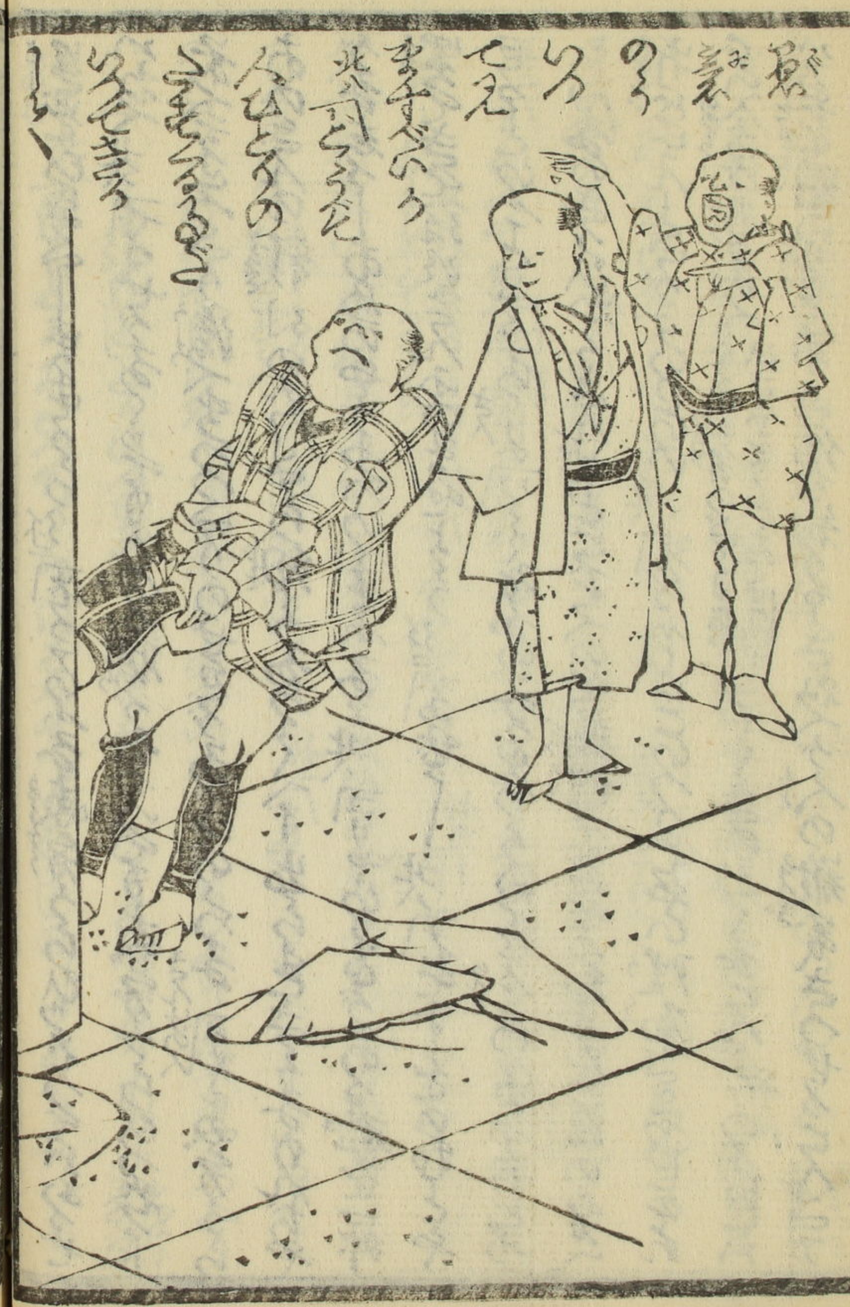
藤の森（ふぢのもり）の社に参詣して

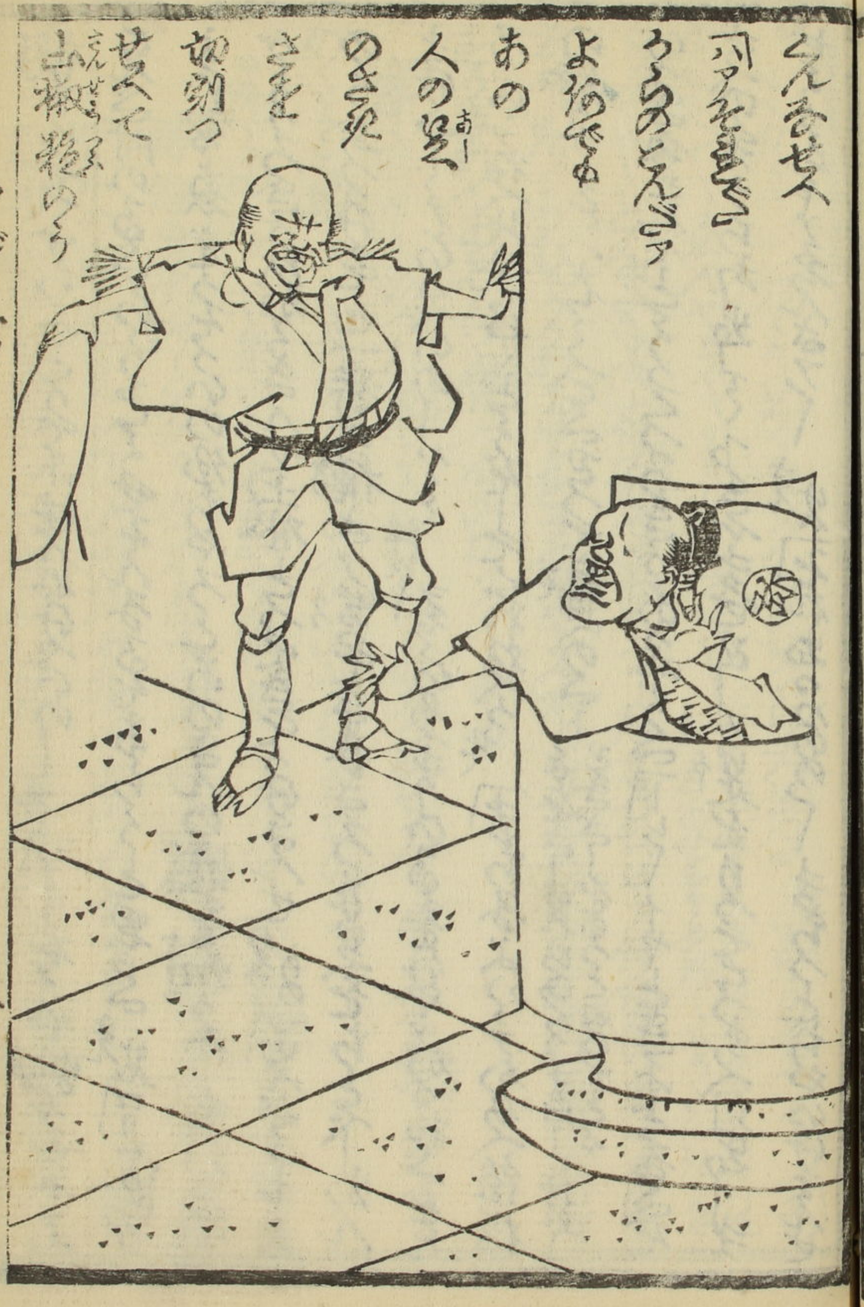
稲荷（いなり）の社にまうで　神壇（うそぶき）の松のおもかげふかまるへあしびのさすみ夜の露（ろ）
稲荷の社にまうでいのりあおゐの茶（ちや）やにやすみをとれよりごふくゝと
北をさしていくほどふむれみ母にも大仏のまへにいたる　北「ヨヤくがう
せのみかなぐさアレ二階から御堂（みだう）のでてある　弥二「ハヽアまことにこれがの
大仏殿（だいぶつでん）あるほど経（けう）より大きさし　そして石垣（いしがき）をみややさやられ

ぐるぐるト門内ヘ入大佛を
ぬすみ出さんと
「ヤアまちやアがれ」
大きな声を
アッかられて
びっくりのひょうし
墨ダラケ
北八「狸の金玉
ると同ドヒッそり
ぬくるをのそくあの
お鼻の穴からの人ざ傘を



さてくおもしろいと北八
ちの枝葉八が鼻の穴
のふる涙
北八「おまえ大きな泡をかくとそうぐらう
あるめへ
三「ヤアアレおまえの鼻の穴をくぐってみるた
三「ヤアこのあほう
北八「こりゃおれの
きれいな肥てあるぞ
ねとれかア
りどうとそこらの
つくそのこころ
タくくこりゃひょうたんみるふるあくる北


おのれ
のう
のうのうと
てえ
まるすべいう
北八「どうだん
人ひとりの
うまもうるぐ
のうそきう
うーん


くんそぜん
「ハアそうぐ
うらのとんぐりア
よなのでも
あの
人のおの
のまえ
さを
切刻つ
せんて
山椒粉のう

今まことの業ふ始まるこの所のさかへ成る古きゆゑを書
出せるものとぞろ又あり理屈を作者が中ふ模様掛様
とする趣向めくしまひぞ

二人りハ三十三間堂を一見し清水をさしてゆくみちすがら　此処ハ
往来賑しく中にもありげな都下の風俗とて男も女もどことなく家和
温順にして高い士農商工の挨拶ハ其の振舞も折目ただしく
きちんとしてなまめかしき嬋娟とも言ふべし見るものふ目
をうばはるゝばかりとなり往来繁にさぞ芝居もろ老若
新町よりも走りくる人の毎に「ホウホウとのくもろきさきホウホウと〳〵
走りてつづきさきされ　弥次「ムまキんく　アノ人が加はつる何かイヤまちうふ為かのある
さるそれさきまへよりかへくりしく也で　あまえ中とね　まちら人ひと「馬なにかそへ以

いきうひがあるとこの　北八「京の陸風も瑞々しくてみろにやア
見きつまりけんふろ山のごとに人を
おつきのなれりまぜんのはなしさうなやとうえてくかくるうまへんでいるを
おそしくあのものいはよくあんこのをことのをまもくうきまうのもの志らとあ
まちで人のとにろるまでもちのるさときのことあまし
くるたるうちも中七日あそうのよき東ふ二人り向ひ合　　青や「これ子の見ぶ男の方
くらいもあそうくきろてくたくのまでとひとのりんちやあるのされおのれ天窓
たくのそこまふそろへ　弥次「なきこてきれとあんがえのらどくのふまうちや
ぎつとしてあやせんのうト　ひとつもおぐひをさはねの木たくさんもちやう見きる　　青や「よくうあとぐひる
うさとろうおやすよのくいろやどこのりんちやあ　弥次「おまうのかうや
跡川橋が小路下ルところだちやい　きろ多や「石へあんとのめでたい　弥次「志ら
まゆ緒とのみへい　さろ多や「とつふのくうだちや　弥次「世辺だちやかい　さろ多や「あさく
されあのまたの四方てくたえらうちうのうえそうえくきさう子　弥次「ほらう人
その力くまちやかい前死でことに嘆めを死ぬあくこうい　さろ多「そりやちえてい

かゝあ
をろ
ぢや
あ
ろ
弥

うきみらそのへ
るろくこのいみ
北八「ヲヒ」てとまるづ
つきみてくろう
権「きづついて
んぐろう
る北八「
んん
でどうし
ね権「さて
まろこんぐろ

ねをこひ鼾耳の眼ゲあきまゐ師ゲるて来て座敷の一段たかる薬人いろのる無病息災老若男女も息災分極楽浄土へまくいとうそんとの九郎兵衛ちやとまくこもりてお帰あされ眞かいい法よのおんのもち吹き北八「ろくまろやぐる時不浄たうんかの際ホきのこ傘をさしてこぶとろふんひ参基からぐる権「むてからこ男のかこんれのおうて是てくく下へ落ちけがせんのづるづくこのでもちや経「こてからこ飛ぐらかくぐ微塵ふるのぐらろう北「まろくへいとぶ人ゲあるあきそね権「さてのぢやるこのるけるも男れ女中ゲ来てこうんる北八「ヲヒ」れでどろあてくこ権「とんでおちてそれうらどうしこね権「そこそ根問さるうろぢやるけ女中へ罪障ゲ深のてよろくく俳の法界で目をまろーこうのるん北八「裏いまろさるんぐろね権「ヤ・・・

そもじさんまでへ北八「イヤおらアちつと癡(ちゑ)をとつて聞(きか)せるがこの金(かね)

猫那落(ねこならく)きいてしまつたが筆がまはらねへといふもんだから婆「それならば

いつてきかしてくんなそうしたらその女中がどうしておもしろいこと

餓鬼(がき)の筆がちがつてゐる北八「ハテナきざちがつてどうした婆「百万遍(べん)を始(はじ)め

このの北八「それからら婆「飯(めし)を食(た)べて北八「それからへ婆「なむあみ陀仏(だぶつ)

北八「それからどうだの婆「なむあみだんぶつ北八「これさ百万遍の後(あと)へ

どうしたのだ婆「なむあみだんぶつ北八「そのあとは婆「ハテせわしない

百万遍だわやこのマア念仏を申してからのことの北八「百万遍の

きもまで済(すん)でおてたまるものか婆「それでもおまへさんへ聞(きか)せるが

根(ね)からおかりきかんせぬやうにらんといつてくだやるのかもちつと辛抱(しんばう)

してきかんせ逆(ぎやく)ちゆうからさんの百万遍あつづつてくだんせ

北八「コリヤあのしろうとばばアきさんおまへのせらくなをせへさかへあわ

あみだんぶつ婆「とてものことに飯を喰てやらんとのみト かたはらにあるたらいきびす桶をまたげて

北八「こりやがつてんのおかりしろくなつてきた

ならのハアなむまいだアチャン

なむまいだアチャン〳〵婆「なんや臣水吉てゐるさうじやこのとます ト北八おかしさを

どうおかしさこらへてゐる

北八むちやうちやうなり

なむまいだアチャン〳〵北「ハアなむまいだアチャン〳〵 チャン チャン

座(ざ)くおだしてうちへとこそ北「十二妃(だまさ)が祭(まつ)りがあるのんうチャン チキチキチャン婆二「なにゆゑへ

チャン〳〵〳〵〳〵ト さうらおなくおとしてきさるが人肉陣(じんにくぢん)の「コレナ〳〵どこでつりよ

妻婆「おまへのそこの手(て)をつてきておまつた

「ちらへど「いんだちやないかいな釣(つり)地所(ぢしよ)におあがつて悪(あく)他(た)流(りう)ろト あつらうかまた二人かんべつき

きよろ〳〵北八「いまの浣(わん)花(くわ)様(さま)へどこへゆくんだがすぐ沖(おき)迴(まはり)何(なに)も世(よ)の中(なか)ねらちち

とかく

妻婆「おかたへはよそのものぢやさかいをとどめやと思(おも)ひくおや北八「ハイ

こちの清水(きよみづ)穀(こく)盛(せい)さんの墓(はか)所(しよ)へとほりかけるる妻婆「こりやあのよ言(いう)が

まちがひでおるといふ内 北八「年遠なれば百万遍 又清「十二ひとへ
くゞる中らふところへ出て いふ方のこゝは出来祈祷所だぢやで ト あんどころ
なるてよりがちて見そでふ あふ人のふたりれなふしはちを出て
舞ふ茶屋つらとんでまゐりて清水のひがしゆくをれ 宿で あつらへ
清水焼の瀬戸物屋の見せさき過行に その日も七ッ坂と四丁
けさくゞりくだり二条の宿屋をとほらんと道をたちまゐるむかふより小
便「こいと大根を荷ひくる男「大根小便よく 北八「ハヽア唐
ものがたりとふる 世間の大根の小便なるのゐついで
ろくるがはて「あまりがの大根と小便とやらはふさするのでふらふ
「あつきまちたとんと小便よく ト よんであくこゑ をとこの声にてよまたちいらるでニ人
「コリヤ／＼ヨイコレ二人りがここで小便をしてゆかんせ 大根二本おくさんせ

ごいす「マアともかくもきてみなさんせ、 ト いふをふりかへりみれバ
あのみちのまちを辻子とりや あそこへ寄まゐりてござるのぞ
さらんとゆく ゆきこちらへ見えて みれバ とふとう「きてやらん
せんの内 ト せうべんをさせておろして 町つきあてて あふむけ
小便をしてゆけとふとえ ト きてとふとりの男「ドリヤ一もん出しやう ト とつて此のおゝ
でござるをすゝめて とう「めつそふなり で出んのつてうそ 中男「許せふ
へいぞあくまひのつ小便ハそれぎりぢやいといふ とう「ヒヤなんでいゝ
ま一度よふからだをふつてみさんせ 中男「ハテ小用くまして出ませて
ゆるしてやるそのわるふけさんでのけてい といふ とう「それでこの大根二本
よふゆきまんのとき二本のそでかんせ 中男「コレさ小用はよくあつても
とちらくのふきりのかすてのうれよその茶粥だらりくてゐるの
とれちがふてこちや肉だらけでおるかな といふ とう「それぢやてこのれゆり
まう だちやりのも 中男「そでらちへめてらんでみまがもりや三年経て

いうて北へ「とんだごろうらあんとんだごろうさうろ吉原
おまへさんぐるへどこたらやらる伝次「さればどころぢやござ金吾「コホヽヽ
六角の御幸たとまるあうよりうへてだわやう絶てだわさう大方
張のあへごらやあるぢやる吉次「六条さまへお出のくる伝二「ヨウそうとて
のりうとへ吉次「ヲヽとさうひとろあごらの
てへの吉「さうりうてゆろくいるお方金「ヲヽとのまゐ
ぐらのやおちんるんぢやる吉「ヨヤ
ぐる家業の頓着へねへてくるる吉次「ヲヽ
ふらやまとさうろみをいつかへへ
うろうあるまとふのとりに金吾「ヲヽ
ろうろをいつ一大事の一人まふひとろ
ひろうろふのせうちいつ吉次「ヲヽ
ゆうろいまへは
ぐるとき

北へ「百ゆへ安いりんご吉次「ヲヽとうさうもさ
あうりうきれ北へ「そでめようコトヽヽ
とえごとっちでおそんへんを伴とりとうろ
ゆくりや歌妓だやうる北へ「ヲヽ
だの吉次「ヲヽせうし服だやうる北へ「ヲヽ雑うドレーヤとりや悔ざく
吉次「ヲヽあらやァぐれさのきろねへ酒の
だうゆまをいひつけるりんご金吾「和のおうるかいうて
者ふのもとんどうりうぐるぐ酒ぐのめ
えおもうろうるトうくありうるぐやどうぐ
北へ「ろんごニリやだろのむき身のせ吉次「ヲヽ
ぢすのの。——乃ちきるみのぐろぐのう酒ゆのねへートト
次内むごうもいろ。——おまとごまるさぎそをとうとふろうぐと——
ふおてよのぐうをまろうと十だろうのおとうをとうふさろ

びんろう 女「あゝ」ト云ふと「まぐろとも女ハイ
おをあけ
あつてとめをしくるさふんとおもつて
かきろけをひらいてそ 云ふと「あんさうしやな
云ひながらひらいてそ
八女の揚代はきさく
一ぱい女 かもんあんだ
一ぱい客 とりかのほ
一きせる八下 仕廻
一ふくらそく
ぜ十六文ニト
コリヤとんだ
そろそろ雑用へ

べつかとるのう
あつかつ又
酒のさかなも
揚代の
うまいうまいと
ありつく北八
やつそれへ↑

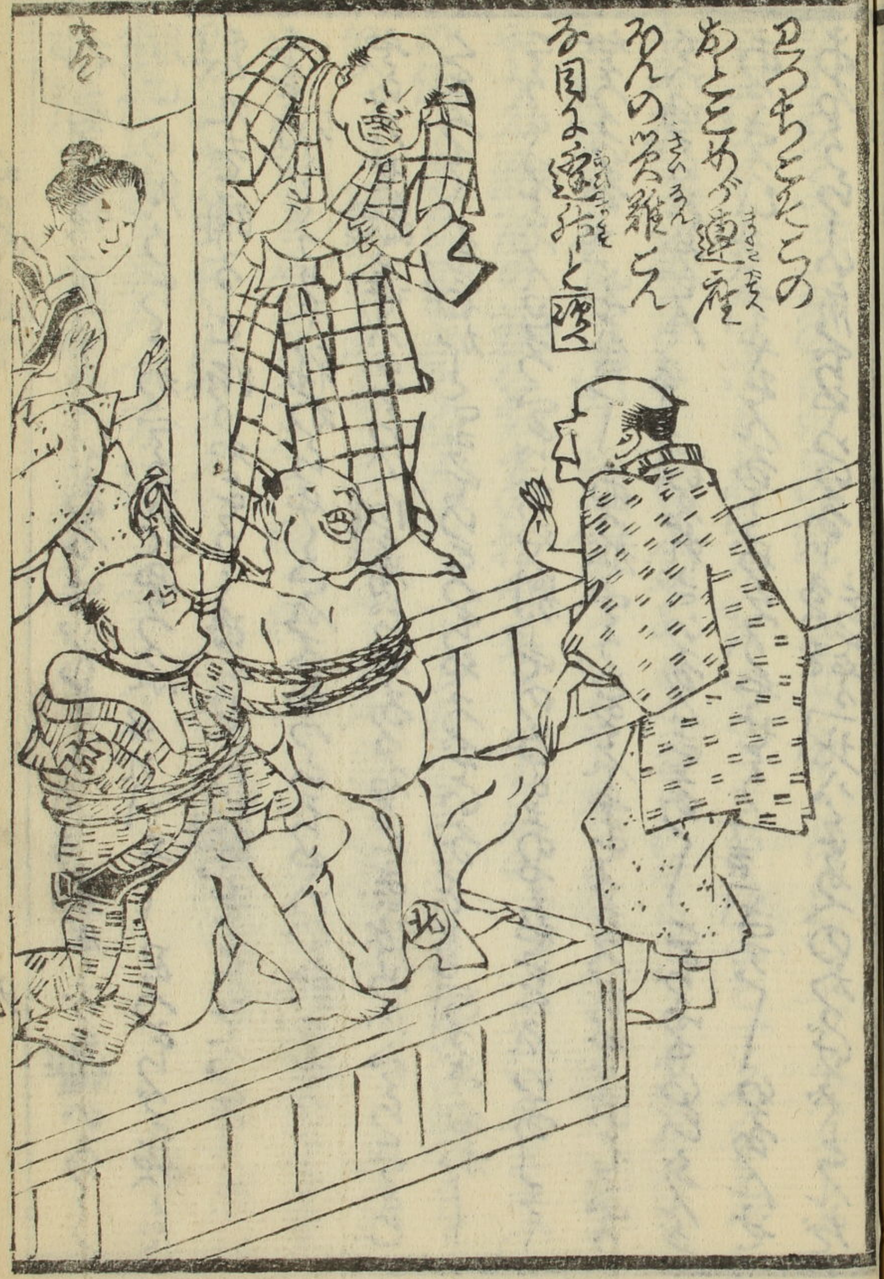
↑このとうふ
北へどれ〳〵
あんざ
イヤコリヤ
おあとそゞろ

かくてあくるあさ
ひるまえまでそ
とのたちのふり
しそやのうちを
ざわつくことま
そのうちの北へよく
仙人(せんにん)ども(ども)あつう
くつもりが
とんだうわあ
んつの音(おと)と
ふるえだしてくる

まるのことなるをらくまちね
うるおもおもしろきものなり

ちどころのもおかんとまれバ北へとらくうひて
ゐををすくことやうやうおうくみおぐりて
る北へにげざ〳〵アゝどうもこゝ女のさうきこ
赤のちうこうばでくるまで女ア
でござんす北へ男の衣(きぬ)の袖(そで)きてつくさうひ
ゐ北へ女ア男の衣の袖をとらへ
のいゐをござのる女ア
ぞのる北へ女ア
ちうく女をそれでかゝ
赤ちうとちやアまらぬんでまこの袖(そで)ハ不通(ふつう)こそ
おさめくさのいせひとるこの隙(すき)かく
よきうのうそんなせうやう女ア

あの このあとうあ そぐもろもろを助けくりきんの一コレを全を合せ
てをぐこと ことも きぐらとてもおるるくら全を合こ都ますコリヤー
北へも北へも北へ川 南無金比羅大権現さま助け給へ
まもゆうかきむきめうちゆうくんりん水あびせうことまた
今比羅さま祈るあくそんこと
源離とうて祈りくことを北へイヤとうもちふくくん今比羅信心ぐぐ
りおもう思ふ心をかけやまふ今とちぐび水行この行者ごとして
今おおぐくの男をたんときそぐぜうぬうで繋舶を
ひうくけ脚帆へ着ッきうのくこうこと こそで祈ることぐぐ木御利益う
ぐぎうのもわらせあうくきずともうたん繋くしてやうり
まえんうその五つ脚後とうくきれ紅イヤ也をうぐおおうやを

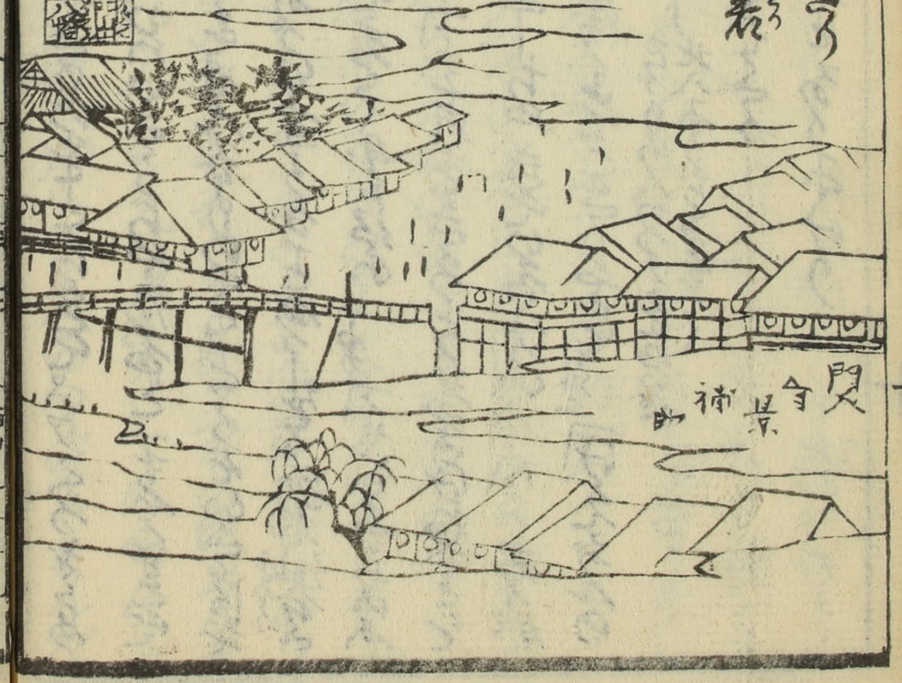


ろうもうそこのの
あとことめう通産
ろんの笑雑えん
お見よ通行と

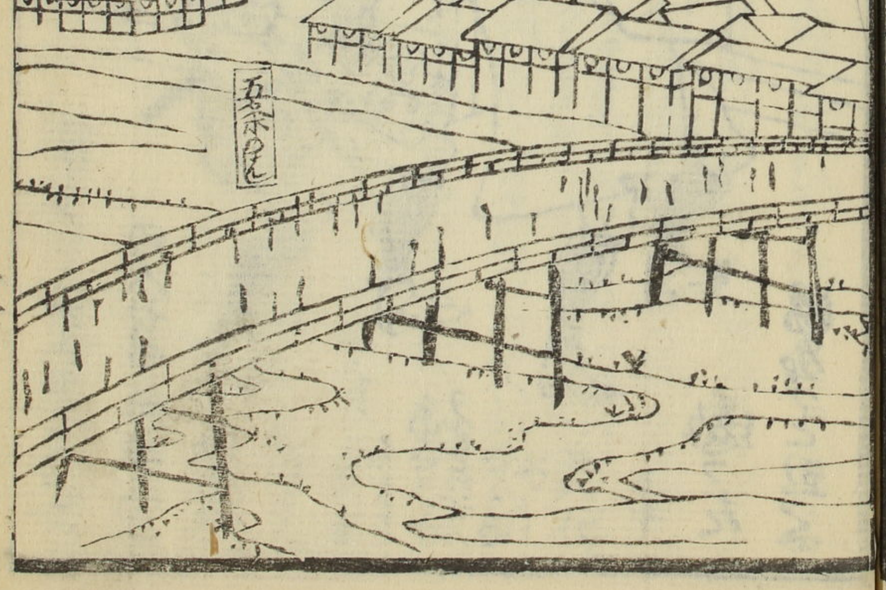
お房の後ろ姿うつまんであるこう
脚絆の紐もとかうとみて
玉九を踊ること治りやそろ〳〵ぬ
十吉「ハヽヽヽコリヤ私からやくこみ
やうらんせ獣等へそらの女房だち
くそろ〳〵そ思かくまつそのころも
そうらうそんそろ〳〵まちや別七のうも
やろうの客「これか〳〵あるが今
ぶらられもせん「そも「のそれさいの
あるさうに「イヤそんなこめ〳〵
あるやうらの「北八「ヲヽ十吉「さア〳〵
北八「そも「のそれさいの
あるさうに「イヤそんなこめ〳〵
あるやうらの「北八「ヲヽ十吉「さア〳〵
のんせ
とらの

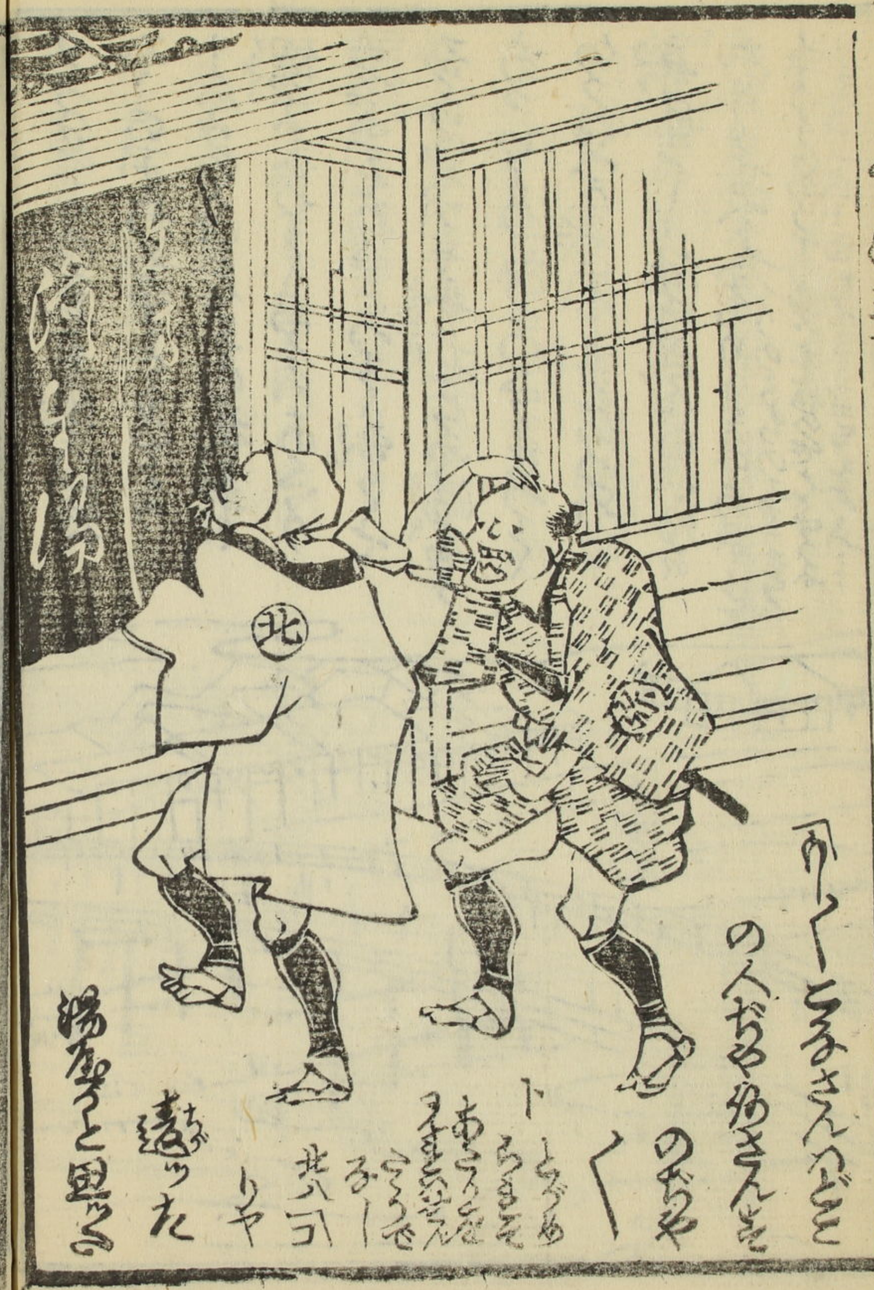
めふあるさ「北八「あのらいらの通つきうのをとらまでハアこうきうめ
ヲきむ〳〵「そも「ふヽヽあのうかいきうどやなるとこまんてまで
やうろう「北八「そのうぐうぐうどぎんやをそぶんてみうりのでもどうぐいてうして
ぐきうきうをそ「そも「ふこうと食めぐ
やうふ御座の荒らもまい物てすま
の後ぐあるこまきそのうんせ「北八「十二これをきうこうきうきけぬくとそ
めんこ「そうく「あまうぶまく後ぎ
こうぶぎんやそうぶやそうぶ「北八「ハヽヽあうが
ろくの男うこれをかこやらうトぶ
うとあのやかうろ死も赤
合死うこまう

新地がくりの朝風身ふまみわくり
又條の橋ふきーかくりくりふ牛若
雛慶の昔あり以出され
北八「かくる身八牛若丸の稽古や
弁慶橋の赤き岩ーや
かくとふまふとうり御殿院の
四海ふくり出八幡もまぐ
どりあてくる祇ぶとの
つるふひろ也たどり行道
さぐら北八「おりべくーはやうら
ねくとふるくふるぎやを



見ふけとどんでも後の一枚
ろの十二かとすともりくよ
しくづくしたふの板ふ
猪ふふのくくぬろへおくり
めくぐこれぐとうくふくて
ろくろ北「イヤ喜ふとこふ湯屋ぐ
あるおようくうくまうくく
くろねくく北「ホンニこくろくへ
奇妙くー法談さんおさるの
おりぐくくふあるかと
くうくうくろのくろまん
ふくろくろくとをねのでさるる
ふくふくくくもをうべー





「ヤ〳〵こちの人どこの人ぢやゆさんをのぞくやう

ト

ちまそ
ゆさんを
ぞう〳〵

ヤ〳〵こちの隣家（となり）よめのどうものさうじそれでせんたくうとうと思ふそばのアリヤ源生湯とゆのとのふりあひだ北八「ヲヽんよめのつら大ぶらひだ北八「まつ〳〵一倍（ばい）さまりくまつくらの所（ところ）北八「ヲヽ一杯（ぱい）ヤ〳〵まつとうやつてあかけるさうれコレお栗（くり）さんかのみあちらこちの火（ひ）もあの日（ひ）赤（あか）いのひとつちやとくさんせ北八「イヤ〳〵夢（ゆめ）もたなこのみやせんコリヤ〳〵ぐらぐらとあぶうのみぐらぐらぐつ子すあやまそう〳〵おぐうのみ北八「ハイお栗（くり）おぐうのみ北八「ヲヽおそうやかゆさんおやまのうんのせものつの栗（くり）くあげんぞのさうじ北八「それちやくお家（うち）さんぐるの茶碗（ちやわん）やさうじ北八「ヲヽ

北八
とふくト
北八ハ

あの人

滑稽談五編下ノ